

A.ギデنز『近代とはいかなる時代か—モダニティの帰結』

○著者略歴

1938 ロンドンの下層中流階級の家庭に生まれる
1959 ハル大学卒業
1974 ケンブリッジ大学より博士号取得
1985 学術出版社 Polity を共同設立
1987 ケンブリッジ大学教授就任
1997 LSE 学長就任(～2003)
2004 イングランド男爵位,労働党貴族院議員

○主要著作物(邦訳有のみ)

1971 『資本主義と近代社会理論—マルクス、デュルケム、ウェーバーの研究』
1972 『ウェーバーの思想における政治と社会学』
1973 『先進社会の階級構造』
1976 『社会学の新しい方法基準—理解社会学の共感的批判』
1977 『社会理論の現代像—デュルケム、ウェーバー、解釈学、エスノメソドロジー』
1979 『社会理論の最前線』
1982 『社会学』
1985 『国民国家と暴力』
1987 『社会理論と現代社会学』
1990 『近代とはいかなる時代か？—モダニティの帰結』
1991 『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』
1992 『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』
1994 『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』(※U.ベック,S.ラッシュとの共著)
『左派右派を超えて—ラディカルな政治の未来像』
1998 『第三の道—効率と公正の新たな同盟』
1999 『暴走する世界—グローバルゼーションは何をどう変えるのか』
2003 『第三の道とその批判』
2009 『日本の新たな「第三の道」—市場主義改革と福祉改革の同時推進』(※上智大学教授渡辺聡子との共著)
※ギデنزが本格的に著述活動を開始したのは、社会理論の有力な発信地がアメリカから再びヨーロッパにシフトし始めた 1960年代の後半で、ドイツのルーマンやハーバマス、フランスのブルデューと同じ流れに当たる。

○キャリア区分

第1期:マルクス/ウェーバー/デュルケムらの古典社会学や、マルクス/ウェーバーの階級論を土台にしなが、階級社会論や国家論の視点から先進資本主義社会を分析(～1980s 前半)。
第2期:古典的社会学を含めたさまざまな社会学理論に依拠した独自の社会学理論(構造化理論)を構築(80s 後半)。
第3期:構造化理論をベースに、時間—空間、純粋な関係、自己、セクシュアリティをキーワードにしなが、近代の分析を行う(90s 前半)。

第4期:近代とは何かを捉えた上で、近代の道徳的再構築に繋がる政治について模索(90s 後半～)。

※ギデンズの研究は一貫して、近代の道徳的秩序再建を模索したものだ」と筆者は考える。よって、本レジュメは、「近代における道徳構築」という視点を軸に据えた。

※ギデンズは社会学を、「知性が勝った特別な部類の学問」と考えていた。何故ならば、個人と社会の間の基本的関係には、単一の、唯一の原因や特質が存在しないためである(⇨例)化学→水素原子が、酸素原子と結びついて池や湖を生み出すことを(意図)していたかどうか考察不要)。

○生い立ち

ギデンズは、近代という時代特徴をその偶有性(他の状態でもありえるが、たまたまその状態であるという属性)に見たが、彼の人生はまさに偶有性を象徴するようなものであった。

ギデンズは大学入学まで、ロンドン市街の近郊地域で育つ。ロンドン市街と言っても、「ロンドンは、いわば外国の都会のような存在」で、「どちらかといえば荒廃した不毛地域」の中で不良グループに対する「慢性的な怯え」の中で暮らしていたギデンズは、「地元周囲の状況につねに違和感を覚え、無性に逃げ出したい気分」で日常を過ごしていたと言う。

現在ギデンズは、「世界中で最も権威があり、またその著述が最も幅広く引用される社会理論研究者のひとりとして、揺るぎない地位を確立」しているが、その「ブリリアント」な人物を生んだ家庭は、所謂「エリート」とは対極のものであった。父親は、地下鉄の車両改装部門の事務職員で、座席の布地を注文する仕事をしており、母親は、結婚後程なく仕事を辞めるという、当時の女性に一般的なライフコースを取る。この両親は幅広く読書をする人ではなく、家庭に本は少ししか無かったようで、ギデンズは、「私の家族では、私よりも前に大学に進んだ人は誰もいないし、高等教育とは無縁でした」と述べている。

転機は、11歳の時に訪れる。進学適性試験イレヴンプラスに合格し、地元のグラマースクールに進学する事になったからである。彼自身、この合格から始まるアカデミズム志向の自身の経歴を全くの偶然と考えているようで、「私がどうして大学に進学したのは、もちろん一方で意志の強さも同じように大切であると思いますが、人の一生がいかにか偶然性に左右されているかの格好の例です」と述べている(ちなみに、試験に不合格だった弟は、現在はテレビ・コマーシャルのディレクターをしている「サクセスビジネスマン」にも関わらず、「疎外感」を抱き続けているそうだ)。

※グラマースクール:大学進学が目的⇨モダンスクール:実業教育が中心。両者は「完全にかき離れた、まるで別の世界」。

このグラマースクールで、ギデンズは学校から「極めて凡庸な生徒と見なされていた」ため、名門大学へは進まず、ハル大学へ入学する。ハル大学卒業後は、学位取得の為、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)へ進学。それまでは「行き当たりばったりの決断」の連続であったが、「その頃になって幾らか学問的向上心が生まれ」たそうである。だが、まだ当時は「学者になろうという考えは、まったくなく、「行政職に就きたいと考えて」おり、修士論文は「遊び半分」で選んだ「現代英国におけるスポーツと社会」というテーマを選ぶ。

※これは、「ウェーバー風に言うと」、スポーツが合理化する過程を証明しようとしたものである。労働者階級のスポーツは競争心が極めて強く、プロ化する傾向があることに引き替え、中産階級のスポーツは、アマチュア精神が浸透しており、競争心を軽視していた。これをギデンズは、「スポーツにたいする異なる志向性は、対照的な私たちの労働状況を反映してきた」と主張。

行政職に就こうと思っていたギデンズだったが、たまたまレスター大学の社会学教員を募集していると聞いて応募して採用された結果、学者というライフコースを選ぶ事になった。「人生における多くの重要な出来事と同じように、学者としての人生も、まったくの偶然のかたちではじまりました」。そして以降は、社会理論が抱える抽象的な問題についての研究や、古典的社会思想の由来についての研究に着手し、地道にキャリアを開拓していく。

但し、ギデンズは教職に就いてからも、暫く不遇な環境にあったようだ。数回学校を移り、ギデンズはケンブリッジ大学で教鞭を取るが、そこではケンブリッジとオックスフォード出身者がもっぱら仕切っていたそうだ。87年にケンブリッジの教授に任命されるまでの10年間、助教授への昇進を9回も却下されたという。ケンブリッジで教授となって以降は、「大学内部でより大きな影響力を獲得」できたようだ。「私のようにさほど生まれつき才能に恵まれていない場合でも、自分が選んだ努力目標にたいして他の人た

ち以上に多くの時間を注ぎ、憂き目を見ながらもこつこつ努力をつづけければ、それだけでその差を埋めることができるのです」と、ギデンズは語っている。

※ケンブリッジでは、所謂エリートコース(パブリックスクールを出て、ケンブリッジかオックスフォードに進学し、卒業後は行政や外交、司法といった旧来の専門的職業に就く)を辿る人々には、親の世代との著しい連続性が見られた。このような問題意識に裏付けられた著作もある。

○第1期

●古典社会学の研究

◎批判相手としてのパーソンズ

ギデンズが本格的に著述活動を開始した当時の社会学界では、タルコット・パーソンズが理論・古典解釈ともに強い影響力を有していた。よってギデンズは、初期のキャリアを、パーソンズを批判の対象に据え持論を展開させることでスタートさせようと試みる。

◎古典解釈(マルクス、ウェーバー、デュルケム、ジンメル社会学の再検討)

・ギデンズによれば、現在では、デュルケム・ウェーバー・マルクスの3人をまとめて「古典社会学の3人の創始者」とする見方が定着しているが、彼が措定する以前は、〈マルクス主義者⇔デュルケム、ウェーバー重視派(パーソンズ)〉との間に見解隔たりがあった(特にデュルケムは特に重要視されてはいなかった)。ギデンズは、彼らは皆来たるモダニティに対して格闘した人びとと考えていた。

◎デュルケムの影響

・道徳的再構築、という観点から、ここではデュルケムのみ言及する。

・ギデンズの古典解釈の中で独特な点は、デュルケムに関しての分析である。「秩序の問題」にではなく「秩序の変動過程とその性格」という問題こそが中心関心だったと、デュルケムの歴史思想家としての位置をギデンズは重視した。この問題意識、更には道徳的秩序のあり方についての考察で、ギデンズはデュルケムの影響を強く受けているのではないか(→第4期)。

・デュルケムの影響が色濃く見られる部分は、以下のような思想部分である

→社会が存立するためには、道徳的秩序が必要である。しかし、伝統的道德体系(伝統的家族、共同体、宗教等)は近現代社会を一つに結びつける社会的接合剤とは成り得ない。何故ならば近現代社会とは、「高度の個人主義を特徴とした極めて複雑な分業体制をとまう社会」で、「共同体や伝統的家族を取り戻すことなど出来ない」からだ。

(デュルケム:「(前近代)機械的連帯」→「(近代)有機的連帯」⇔ギデンズ:前近代と近代の‘断絶’)

・そこでデュルケムが近現代の秩序回復の方途として研究したのが、「道徳的個人主義」である。その萌芽を、デュルケムはフランス革命の精神(エートス)に見た。「社会的な、ある意味では集会的な性質をもつだけでなく、同時にまた一人ひとりの自由が最も重要であることを認める、そうした道徳体系を手にすることができる」と考えたデュルケムは、「たんに人権と個人の自由の意義を認めるだけでなく、同時に…強い連帯性をもつ、…「非宗教的な共和制国家」構想を思い描いていた(⇔ギデンズ:第4期)。

※デュルケム自殺論再検討

・ギデンズは、デュルケムの自殺に関する論考の再検討も行っている。ここでギデンズが行ったのは、自殺研究における「実証主義的」アプローチと「現象学的」アプローチという対立する2つの方法論を織り交ぜた見方の構築である(この傾向は、70~80年代のギデンズ著作の特徴)。

▽実証主義的アプローチ:「社会的事実」(統計データ等、実証可能なもの)と、外在要因との間の客観的相関関係を考察するやり方。デュルケムの方法論が代表的と考えられている。

▽現象学的アプローチ:意識に内在されたもの、直感されたものを絶対的なものとして捉える方法(文化的/サブカルチャー的要

素が個々の死を自殺として分類するかに影響を及ぼすと考える)。フッサールが代表。

⇒ギデンズの著作に共通するのは、二項対立図式を止揚しようとする志向である(折衷策では無い)。

例)〈「実証主義的」⇔「現象学的」〉、〈「社会が個人を既定(構造主義?)」⇔個人が社会を既定→「構造化理論」〉、〈「右派」⇔「左派」→「第三の道」〉等

◎古典解釈から独自理論構築へ

来たるモダニティの問題と格闘した古典理論家たちだったが、ギデンズは、彼らは「モダニティの暗黒面」を十分に把握できなかったと考える。マルクスとデュルケムは、「いずれも、近代が切り拓いた恵みにみちた将来性は、そのマイナス面を補ってあまりあると確信して」いたし、とりわけペシミスティックなウェーバーでさえ、「モダニティの陰鬱な側面が結果的にこれほど広範囲に及ぶとは十分予想していなかった」。社会的世界と自然的世界に関する知識の増加は、社会的世界と自然的世界にたいする統制の増大をもたらすと多かれ少なかれ考えられていたのである。例えば、「生産力」の増進が大規模な自然環境破壊の可能性をもたらすこと等々、近代が人間のコントロールを超えた「危険」をもたらすとは、誰も予想だにできなかった。

よってギデンズは、「モダニティ」を捉える為の独自理論＝「構造化理論」の構築を行い、それをベースに「モダニティ」の制度分析に取り組んで行く。

○第2期

●構造化理論

◎行為→構造/構造→行為の二分法克服

・当時のアカデミズムでは、「行為」が「構造」をつくるか「構造」が「行為」を作るか、という二分法が議論の焦点であった。ギデンズは、この分裂を20世紀社会理論の欠点だと考え、当時の理論(主な批判の対象としてはパーソンズに代表される構造機能主義)を批判的に検討しながら、構造と主体の相互依存関係を解明する理論の構築を試みた。

※パーソンズ理論「構造機能主義」(AGIL 図式): 社会体系を構成している諸要素のうち、相対的に恒常的な部分を「構造」として規定、それ以外の相対的に動的な部分とその「構造」とを「機能」という概念によってつなぎ合わせる、という理論。

◎「イメージ換気装置」としての「構造化理論」

・構造化理論とは: 恒常的な社会関係が、行為の意図せざる結果として再生産されることに焦点を置き、そのようなプロセスで社会システムが成立する関係を、主体のあり方を通じて捉えた理論。

・行為と構造の非分裂性: 「構造が行為の媒介手段となり、同時に行為の結果となる」(従来の一方向的な定義ではなく、双方向的、循環的な関係を構想した)(ルーマンの「オートポエシス」(生物学由来)から着想)。

「英米では、構造とは、どちらかといえば所与の形式であり、ある種の可視的な形式でもあります。しかし、私は同時にまた、行為能力が個人のなかに内包されているにすぎないという考え方からも免れたかった。行為能力を、むしろ人びとの行為の流れとして理解し、行為能力を自己意識の属性と結びつけてとらえようと思いました。」

「私は、議論を「個人」からはじめたり、あるいは「社会」からはじめるかわりに、むしろ反復的に生ずる社会的実践という考え方を、社会科学がおこなおうとすることがらの中心にすえていったのです」

「私たちは、社会生活を、たんにあちら側にある「社会」として、あるいはこちら側にある「個人」の所産としてとらえるだけでなく、人びとが遂行する一連の継続した活動や実践としてとらえていくべきです。」(『ギデンズとの対話』)

↓

◎「構造の二重性」

・「構造」＝「虚的实在」: 構造は主体の行為を制限するが、そのような構造を産出するのは主体自身。構造は、主体が想定する限りにおいて存在する。

・「主体」:主体による行為選択は、常に構造の存在を前提にしている。主体にとって完全に「自由」な行為など存在しない(集合体を行為体と考えることは出来るが、ギデنزは基本的に人間という個人を念頭に置いている)。

⇒構造の二重性:「構造が行為の媒介手段となり、同時に行為の結果となる」

社会的行為の生産と再生産の中で引き出される(今までに引き出された)規則と資源が同時に(今後の)再生産の手段となる

↑

◎主体(行為者)の3つの意識

・ギデنزは、主体が構造に及ぼす影響について把握する為、主体の意識を3つに分類する:①「言説意識」(主体によって反省的に言及される意識)、②「実践意識」(主体によっては存在が必ずしも自覚されていない意識)、③「無意識」(行為者の行為に直接的に関係してこない意識)→「構造の二重性」を考えるに当たって重要なのは「実践意識」と考える。

例)発話行為→言語意識による(内容を意識しつつ話す)

⇔発話の際の文法規則→実践意識(言語を通じての対象化が困難な、経験を通じて習得される知識を活用する意識)

・実践意識による行為選択

→よって、「主体が構造を再生産している」というとき、主体が自身の行っていることを自覚している必要はない。主体による構造の再生産とは、実践意識による行為の制御を通じて行われていること、言い換えれば、「言語によって反省的に言及できない意識によって行われていること」を意味する。

＝構造が存続するのは行為の決定が行為の条件に再帰するからであったが、条件に再帰する結果は行為者に自覚されていない「意図せざる結果」であり、主体によって構造化のメカニズムが自覚される必要はない。

(だから、構造に主体が規定されつつも、主体が構造を意図せず再生産しているのだ、と論証出来る。)

↓

◎「再帰性」

・行為の条件が構造として結実することを説明するために、ギデنزは「再帰性」という概念を導入する。

→行為の結果が条件として構造に再帰することで、構造ははじめて行為の条件であり結果でもあることが可能になる。

＝構造→主体による行為(主に実践意識)→構造再生産→行為→…と循環することで構造が現れる。

※行為の結果が条件として構造に再帰するといっても、後続する行為の条件を形成しているのであって、先行する行為の条件ではない。しかし、「構造は時間という次元を超えて存続するもの」として主体に了解されるため、条件と結果のずれは主体の意識の中で解消される→構造はあたかも主体の意識と独立、主体は構造に依拠して行為するよう把握。

＝構造が時間という次元のなかではじめて存続が可能になるメカニズム(‘時空間概念’導入)。

◎二重の解釈学

・「結果が条件に再帰する」という視点はギデنزの中で一貫している考え。社会科学的な言説自体、そのようなメカニズムを有している(例)デュルケムの自殺論→統計学として自殺を捉える風潮が生まれる、等。社会科学的言説は、記述である限りは社会のあり方への結果、同時に社会のあり方を規定する条件へと再帰する可能性を持つ。

●『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』

⇒1. モダニティの分析 2. モダニティの帰結 3. 「道徳的再構築」の方法(結論)、という3つが章立て。

◎本書の概要

＝「近代をいかに捉えるか」(モダニティの(‘諸刃の剣’的性格についての)制度分析)

「私はこの論考の大半を通じて、モダニティの本質とともに、今という時代の向こう側に立ち現れるかもしれないポスト・モダンの秩序についても、新たな解釈を提示していきたいのである。」(p.16)

※「モダニティ」…17世紀以降のヨーロッパに出現し、その後ほぼ世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式。

社会の歴史を特徴づけた伝統や慣習、習慣、型にはまった行い、行動期待、信念によって束縛されない社会として生み出した、社会的付置連関を指す。

・ポイント: 前近代⇔近代との断絶 + 近代⇒現代との連続

・モダニティは「本質的にグローバル化していく傾向にある」為、それ以前の伝統社会と本質的に異なる。一方、現代社会は、その近代の性質が徹底した時代であり、近代の延長線上にあたる。

・現代=「高度近代(ハイモダニティ)」「後期近代(レイトモダニティ)」「再帰的近代(リフレクティブモダニティ)」(≡ベック「第二の近代」/バウマン「液状化近代(リキッドモダニティ)」)、すなわち、モダニティを徹底させた社会に我々は生きている、と措定する。

「われわれは、ポスト・モダニティの時代に突入しているのではなく、モダニティのもたらした帰結がこれまで以上に徹底化し、普遍化していく時代に移行しようとしているのである。」(p.15)→「ポスト・モダニティ論」(p.187 参照)

1. モダニティの分析

◎伝統社会とモダニティの非連続性

・「非連続的発達」:近代の社会制度はいくつかの点で類例がなく、伝統的秩序類型と形態上区別できる⇔(社会)進化論

◎モダニティの有すダイナミズムの三つの源泉

・①時間と空間の分離 ②脱埋め込み ③再帰性

「モダニティの示すダイナミズムは、《時間と空間の分離》、社会生活を時間空間面で正確に「帯状区分」するかたちでの時間と空間の再結合、社会システムの《脱埋め込み》(時間空間の分離にともなう諸要因と密接に関連している現象)、および、知識の絶え間ない投入が個人や集団の行為に影響を及ぼすという意味での社会関係の《再帰的秩序化と再秩序化》に由来している。」(p.30~31)

↓

①時間と空間の分離

・前近代社会:場所と空間は概ね一致。社会生活の空間的特性は「目の前にあるもの(特定の場所に限定された活動)」

⇔近代社会:現場と無関係な空間表示が可能になり、更に空間を構成単位ごとに別の空間に置き換えることで、時間と空間が切り離される。「目の前にいない」他者との、つまり、所与の対面的相互行為の状況から位置的に隔てられた他者との関係の発達を促進することで、空間を無理やり場所から切り離していく。

↓

②脱埋め込み

・社会関係を相互行為の局所的な脈絡から「引き離し」、時空間の無限の拡がりの中に再構築すること。

・これは、「抽象的システム」=(i)象徴的通標(ii)専門家システム、により可能になった。

※「抽象的システム」:近代における信頼の源泉。主体が行為にあたって信頼するのは、個別の文脈に固有の前提ではなく、他の文脈にも応用可能な一般化された前提となる。

i)「象徴的通標」:いずれの場合でもそれを手にする個人や集団の特性にかかわらず「流通」できる、相互交換の媒体。ギデンズは特に貨幣を指す(貨幣:時間を括弧にいれ、それによって取り引きを個々の交換の場から切り離す手段となる)。

ii)「専門家システム」:「われわれが今日暮らしている物質的社会的環境の広大な領域を体系づけている、科学技術状の成果や職業上の専門家知識の体系のことをいう。」(p.42)(例)弁護士、医者等)

※信頼

・ここで重要なのは、近代においては誰も抽象的システムから逃れられない、という点である。それは、人びとはが、専門家知識がもたらす利益計算やリスク計算に依存して生活せざるを得ない為である。

(⇔前近代:専門家(例)聖職者、妖術師)の知識を無視する事が出来た)

・信頼には①顔を合わせる相手への信頼(「顔の見えるコミットメント」)、②抽象的システムへの信頼(「顔の見えないコミットメント」)の二種類がある(①と②が交わる場所＝「アクセスポイント」)。②は基本的に①を必要とする。

③再帰性

・「再帰的モニタリング」: 日常的に、自らが行う事柄の根拠と普段に「接触を保ち続けている」こと(構造化理論参照)。

※再帰性について言えば、これは近代固有の特徴ではないが、近代へ移行するに当たって再帰性は異なる特質を呈する。

…前近代: 再帰性は、伝統の再解釈と明確化だけにほぼ限定。時間の尺度においては「未来」よりも「過去」の側により多くの比重が置かれた上で現在が構築される。

※伝統: 行為の再帰的モニタリングを共同体の時空間組織に結びつけていくもの。個々の活動や経験をいずれも過去、現在、未来からなる連続性のなかに挿入していき、代わって時間や空間を、社会の実際の営みの繰り返しによって構造化する(≠「構造化理論」←主体の行為により構造が再生産される)

…⇔近代: 「近代の社会生活の有す再帰性は、社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して新たに得た情報によって常に吟味、改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていくという事実に見いだすことができる。」(p.55)更に、「モダニティに特徴的なのは…再帰性が…見境もなく働くことなのである。」(p.56)

◎再埋め込み

・抽象的システムが提供する信頼は、一般的かつ抽象的であるがゆえ、個別の文脈に応じた適切な行為を行うことが困難。

⇒モダニティによって「脱埋め込み」がなされた後、「再埋め込み」する必要性がある。

・再埋め込み: 脱埋め込みを達成した社会関係が、時間的空間的に限定された状況のなかで、再度充当利用されたり作り直されていくこと(再埋め込みした行為状況は、脱埋め込みを支えたり、蝕んだりする(両義的))。

(〈脱埋め込み→再埋め込み〉の過程に、ギデنزは「モダニティの暗黒面」に克服しうる「道徳的再構築」の端緒を見る)。

2. モダニティの帰結

◎モダニティの制度的特性

・「モダニティという制度は、支配的な単一の制度で語れるものではなく、次の密接に関連した4つの特性を持っていると解するべきである。」(p.80)

→①(国民国家を背景とした)資本主義、②産業主義、③監視(情報の国家管理+中央集権化)、④軍事力(p.80 図)。

・この4類型に従って、グローバル化についても説明される。

⇒①世界資本主義経済、②国際的分業、③国民国家システム、④世界の軍事的秩序(p.92 図)。

※グローバル化: 「ある場所で生ずる事象が、はるか遠く離れたところで生じた事件によって方向づけられたり、逆に、ある場所で生じた事件がはるか遠く離れたところで生ずる事象を方向づけていくというかたちで、遠く隔たった地域を相互に結びつけていく、そうした世界規模の社会関係が強まっていくこと」(p.85)

↑但し、同一方向の変化のみとは限らず、「むしろ、相対立する趨勢のなかに生じていく」(p.86)。

(例)A 都市での趨勢とB 都市での衰退がリンクする)

◎モダニティの帰結(→ i . グローバル、ii . ローカル)

(i) グローバルレベル: 拡大するリスク

・モダニティ: 西欧に起源がある制度変容←(「国民国家」+「体系的な資本主義生産」)という別個の複合組織体が大下支え

→「権力」発生: 「他のいずれの伝統的社会形態も、この権力に抵抗して、地球規模の発達傾向の影響を受けずに完全な自立性を維持することはできなかつたのである。」(p.216)→グローバル化: 西欧制度の拡散→モダニティの普遍化

・「時空間」が分離し、「脱埋め込み」により再統合され「グローバル化」することで、社会的リスクも全世界規模に拡大する。先程の4類型に分けると以下ようになる。

①資本主義、②産業主義、③監視、④軍事力

⇒①社会の階層化(資本家層⇔労働者層)、②自然環境破壊、③全体主義の強化と増大、④核戦争の脅威(p.212 図)

(ii)ローカルレベル:「親密性の変容」+獲得する「自己アイデンティティ」

・マクロレベルでの「グローバル化」という変動は、ミクロレベル、すなわち人びとの日々の生活にも変化をもたらす。

⇒「親密性の変容」と、再帰的に獲得しなければならない「自己アイデンティティ」

・前近代:人びとの生活は「場所」に結びつき、伝統が時間の連続性(過去-現在-未来)のなかで信頼感を維持し、またそうした信頼感を社会の型にはまった現実の営みに結びつけていく限りにおいて、存在論的安心感に基本的に寄与。共同体の慣習などにより親密な関係規定、個人は自らの意志で親密な関係を構築することができ、またそうせざるをえなかった。

→関係性の基盤は人格に対する信頼ではなく、地域共同体や親族関係のなかでの結束自体が人格化(固定的)。

⇔近代:所与のものとしてある信頼の前提(伝統的秩序が提供する規範)が崩れた結果、信頼の獲得は当事者たちが「取り組む」べき企てへと変化し、依拠する先が「人格」(例)実証可能な誠意や率直さ)になる(可変的)。

=対人関係は、「純粋な関係(ポスト伝統的対人関係)」へと変容する。

⇒相互の自己開示過程の要求⇒自己探求の必要性:(抽象的システムを利用した)「アイデンティティの発見」へ

※自己達成における関心:「自己達成にたいする関心は、個人ではほとんど統制できない外部的な脅威を与える世界にたいする自己愛的防御だけでなく、ある面で、グローバル化が日常生活に影響を及ぼしている、そうした状況の《積極的な専有》でもある。」

※再帰性による(動機付けの執拗さ)→「嗜癖」という負の指標へ:アイデンティティ構築の為の再帰的モニタリングによる反復行動→自立を疎外する方向へ(例)依存症)

◎「モダニティ」=「ジャガノート(超大型トラック)」

「私自身は、ジャガノートと通称される超大型長距離トラックー人類が団結してある程度乗り越えることはできるが、同時に突然操縦が効かなくなる恐れもあり、みずからバラバラに解体しかねない、そうした巨大出力エンジンを装備して疾走する車一のイメージを用いたほうがよいように思う。」(p.172)

※古典理論家たちのモダニティの把握

デュルケム:分業は伝統的共同体を壊すが、一方で有機的連帯による自発的紐帯が生まれる(産業主義に重点)

ウェーバー:官僚制的合理性の束縛が強化され、人びとの行為を固定化(合理性に重点)

マルクス:モダニティ=怪物(但し統制可能)。資本主義:人間の欲求を統制したかたちで充足させていくが、一方で市場に託す為非理性的(資本主義に重点)

⇒三者共、モダニティが人間の手を離れて暴走する可能性については考慮に入れておらず。

3.「道徳的再構築」の方法

・モダニティが引き起こしたグローバル化により、今日人びとは多くのリスクを引き受けなければならなくなった。だが一方で、「主体的に行動することでより良くコミット出来る可能性」も開ける。ギデンズはこう指摘し、その端緒を、「モダニティの有す再帰性に不可欠な、未来志向的思考の示す極めて反事実的特質」に見る←これを道徳的秩序回復の契機と見る。

◎ユートピア的現実主義

・モダニティは本来的に未来を志向しているため(再帰性)、「未来像」は反事実的性質を帯びる。そしてその未来はグローバル規

模のリスクを伴い、それは予測が困難である。

・だが一方で、肯定的意味合いも含まれている。「代わるべき未来を心に思い描き、その未来像の喧伝をとおしてその実現を促進していくことができるかもしれない」という点もまた、再帰性の結果だからである。

「発見すべき自己のアイデンティティがあり、果たすべき自己の運命があるという、極めて私的な経験が、政治的に大きな破壊力を持つようになった時代に、われわれは生きている。」(p.196)

⇒「解放の政治学」→「生きることの政治学」、すなわち「何かからの自由」→「何かをする自由」という概念を提起する。

…「解放の政治学(不平等の政治学)」=不平等や隷属からの解放に関心を寄せる徹底的な社会参加。

…「生きることの政治学(自己実現の政治学)」=すべての人のために、満ち足りて納得のいく生活を実現しうる、つまり、「別の人々」など存在しないすべての人びとのために、そうした生きることの可能性を促進させようとする徹底的な社会参加。

・それを、「自己実現が自己のアイデンティティの基盤となる」という、モダニティがローカルレベルでもたらす性質を利用し、グローバルのレベルで展開させていくこと=社会参加を通じて行為を起こすことが、近代における道徳的再構築に繋がる、という主張を行う。何故ならば、「正義や平等という観念のより一層の確立が解放の政治学の基盤をなすように、私的なことがらに関する倫理」は、生きることの政治学の基盤をなす特徴」であるためだ。

⇒ローカルな社会参加—「解放の政治学」—「生きることの政治学」—グローバルな社会参加

(=一人ひとりの利益と地球全体の組織化との調整こそが、最大の課題となる)

「未来によせる期待は、現在にとっての不可欠な要素をなし、それゆえ、未来によせる期待は未来が実際どのように展開していくかにはね返っていく。つまり、ユートピア的現実主義は、未来を知るための「窓を開く」ことと、政治的未来が現時点において内在する現行の制度的傾向に関する分析とを、結びつけていくのである。」

(→第4期:政治の領域へ進出して、政策的に道徳的再構築を行うための提言を行う:ローカルな民主制機構をグローバルなからみ合いのなかに関係づけていく)

※徹底的な社会参加(社会運動)

・社会運動の形態を、モダニティの4つの制度分析と照らし合わせると、以下のようになる。

①資本主義、②産業主義、③監視、④軍事力

→①労働運動、②エコロジー運動、③言論の自由と民主化への運動、④平和運動(p.198)

◎ポスト・モダンの秩序=「ポスト稀少性システム」

・ユートピア的現実主義の後現れるかもしれない理想的な秩序を、ギデンズは「ポスト稀少性システム」と呼ぶ。

・解放の政治学の観点からだけ考えれば、資本主義を超越していくためには、資本主義市場が生み出した階級分化を凌駕していく必要がある。しかしながら、生きることの政治学は、経済的尺度が人びとの暮らし向きを決めるような状況を凌駕する必要性を指摘している→「ポスト稀少性システム」の必要性。

「資本主義と国家社会主義の「向こう側」に、おそらく全地球規模で調和のとれた、ポスト稀少性の経済秩序が生まれる可能性を見いだすことができる」

・「ポスト稀少性システム」:

①資本主義、②産業主義、③監視、④軍事力

→①社会科された経済組織、②地球経済介護システム、③一元化された世界秩序、④戦争の克服(p.204 図)

・「ポスト稀少性を前地球規模で遂げた秩序は、必ずしも経済成長をすべて放棄してしまうような体制ではない。むしろ、それは、発展途上地域のより一層の繁栄のための手段として、先進国でのライフスタイルの徹底的な見直しが計られていくような体制」(p.241)とギデンズは述べる。

・資本主義市場への「統制」→ディレンマ。市場を全包括的機関による中央集権化された統制のもとに置くことは、経済的に効率が悪く、政治的権威主義に結びつく。他方、市場になんの統制も加えず、市場の動きに自由に任せることは、ライフ・チャンスの

面で集団間や地域間に著しい不平等を生む←ポスト稀少性システムはディレンマの向こう側へ導く。

「なぜなら、主要な生活財がもはや不足しなくなれば、市場の尺度は、広範囲に及ぶ剥奪状態を維持する手段としてではなく、もっぱら情報伝達装置として機能することができるからである。」

◎反論に対して

・現在: 国家間や地域間の不平等がひととき顕著で、また資源がすでに逼迫している世界で、ポスト稀少性という概念は、はたして意味をもつのか？

→「むしろ、私としては、世界が自己破滅の道をたどらないようにするためには、《他にどんな選択肢があるのか？》と問いたいのである」(p.206)

ギデンズのスタンス: 社会理論は、社会を分析し記述することでそのまま批判の企てとなりうる。だが、批判を保証する普遍的価値はどこにも存在せず、歴史の法則性もない。

⇨「反ユートピア主義的認識に立ちながら、それでもなお批判的たらんとするギデンズの姿勢を集約するもの」(p.251)。

※世界規模で社会化された経済組織はすでにいくつかのかたちで存在している(→超国際企業間や政府間の協定等)

◎反響

〈批判〉

・前近代と近代の断絶性批判(ローランド・ロバートソン)、近代と後期近代の連続性批判(トムリンソン)。

〈日本における援用〉

・「純粋な関係」拡大→政治的な事柄や社会問題から引きこもり、自分の身近な事柄のみに関心を持つような現象としての私生活化、ミーイズム、マイホーム主義なども対応する、という部分を日本的文脈で用いる(cf. 土井隆義 2003)。

○第4期

・ギデンズは、近代という時代特徴把握を第3期で行った結果、「生きることの政治学」により「ポスト稀少性システム」を導くことが、来たる「ポスト・モダン」の時代への架け橋ともなりうる、モダニティの道徳的再構築だと考えた。

・再帰的近代というコンセプトを強調するようになった1989年以降、ギデンズは、この構想を更に具体的方向に発展させ、再帰的近代における民主主義や政治問題へも積極的にコミットし始める。

・「私たちは再帰的近代のメカニズムの中で、近年特に再帰性の高まる時代を生きており、これまでになかった困難に直面している。だが、私たちはいずれそのことを自覚し、自らの生きる道を自らで選び取り、主体的に政治にコミットするようになる。そうすれば、こうした困難は克服できるであろう」、とギデンズは考えている。

◎ギデンズの政治理論

・「第三の道」「新しい民主主義」等に結実するギデンズの政治理論は、グローバリゼーションを含めた近代の変容という社会学理論的な前提の上に組み立てられたもの(個人生活や国内政治から、グローバルな統治の枠組みについてまで、幅広く論じている)。

※これは、1990年代に、ブレア政権をはじめとして欧州の政治情況に強い影響を与えた。その後2001年の同時多発テロや、イギリスのイラク戦争への参戦などを経て、いくつかの重要な変節を遂げている。

・「ギデンズの構想は一口に言ってしまうと、「国家」対「個人」という枠組みの中で、自己責任で市場化された世界を生きることを強いる新自由主義的な発想に対し、人々が連帯し、生きる基盤となる「コミュニティ」や「市民社会」をエンパワーし、政治の中心とすべきだというもの」。

・ギデンズは、国家ですらグローバリゼーションの波にさらされて弱体化しているのに、共同体再建など可能かという疑問の元モ

ダニティを分析した。結果、伝統的共同体も、伝統的「市民社会」にも立ち返れないと結論付ける(前近代との断絶)。

→「能動的信頼」に基づく関係の構築。グローバルな秩序における能動的信頼の領域とは、「コスモポリタンのコミュニケーション」(ギデنزの考えるコスモポリタン:個人や集団が抱く理念や、没頭する実践に対して負っている責任を自覚し、振る舞う存在であるニデュルケムの近代構想)

◎批判(鈴木謙介)

「市民的なもの、社会的なもの、人々とのネットワーク的連帯といった要素がますます重要性を帯びていくと見なす市民的グローバリゼーション論が、他方でますます世界を「分断」する可能性があること」を指摘。その原因となるのは、「グローバルな自意識の拡大による、ローカルなアイデンティティへの嗜癖状態の顕在化」が起こる＝「〈反転〉したグローバリゼーション」

※グローバルの広がり、ローカルなアイデンティティへの希求を強める再帰的性格や再帰的運動は、原理に従うならば、多元主義とは折り合うことのできない、絶対的なものを奉じることによってアイデンティティへの欲求を満たそうとする「反転」した方向へ。

グローバル化した〈市民〉によって営まれる社会は、どのような価値を抱いていても、それが他を尊重し、侵害しない限りにおいてのみ認められる、多元主義的社会。だが、多元主義の「外側」は、それがグローバルなものである以上は存在しないため、その多元主義に賛成しないということは、自動的に〈市民〉、すなわち人間であることを否定されることになる。そのためグローバル秩序の外側に置かれた存在は、テロをもってしか臨むことができない。

→グローバルに接続されると同時にローカルに分断されていく、というグローバリゼーションのメカニズムを肯定する形で構想されるグローバルな市民社会論は、それ自体としては有用な部分もあるものの、看過することのできない危険性を孕んでいることを理解した上で、グローバルなもの、ローカルなものとの媒介項としての「国家」の役割を見なおさなければならない。

○参考文献

A.ギデنز(松尾精文/小幡正敏[訳]) 1993 『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』 而立書房

U.ベック/A.ギデنز/S.ラッシュ(松尾靖文/小幡正敏/叶堂隆三[訳]) 1997 『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』 而立書房

A.ギデنز/C.ピアスン(松尾精文[訳]) 2001 『ギデنزとの対話—いまの時代を読み解く』 而立書房

貝沼洵 1996 「構造化論の射程」『20世紀社会学理論の検討』 有信堂

那須嘉 1997 『クロニクル社会学—人と理論の魅力を語る』 有斐閣

宮本孝二 1998 『ギデنزの社会学理論—その全体像と可能性』 八千代出版

数土直紀 2001 「ギデنزとイギリス社会学」『社会学理論の〈可能性〉を読む』 情況出版

鈴木謙介 2007 『〈反転〉するグローバリゼーション』 NTT 出版

<http://www.honza.jp/senya/1388> (松岡正剛の千夜一夜 第1388夜「〈反転〉するグローバリゼーション」)